

# 安楽死 揺れるオランダ

2002年に世界初の安楽死法を制定したオランダが、「死なせてよい生命」の範囲をめぐって揺れている。安楽死の広がり、認知症の高齢者や精神障害者、「人生はもう無意味」と考える人まで死の権利を主張するようになり、国内で「行き過ぎ」という懸念も高まる。

(アムステルダム 三井美奈)

## 苦悩にじむ遺書

「世界が毎日縮んでいく。本当は一人息子(17)の成長を見ていたかった」遺書に苦悩がにじみ出る。5月、62歳のヤンヘンク・リーテマさんが安楽死の前日に書き残した。アルツハイマー病と診断されてから2年半。認知症が進む苦痛に耐えられず、医師に致死薬処方をお願いした。

姉のイナ・ハイマリーテマさん(70)は「闘病の苦しみを見てきたから、反対なんてできなかった」と回想する。

兆候は57歳で表れた。物忘れがひどくなり、運転中、突然ハンドル制御ができなくなった。2年後に退

## 23人に1人が…

安楽死者は昨年、国内で6585人。死者全体の約23人に1人が安楽死していることになる。

安楽死は、患者の要請に基づき致死薬を飲ませるか注入して即死させることを

## オランダの安楽死の要件

- 患者が自発的に要求
- 苦痛が耐え難く改善の見込みがない
- 医師による十分な情報提供
- 医師、患者が「他に代替手段がない」との結論に達する
- 複数の医師による診断
- 処置時に万全の医療ケアを行う



ヤンヘンク・リーテマさんの写真を見ながら、夫と思い出を語る姉のイナ・ハイマリーテマさん(右)＝三井美奈撮影

## 認知症高齢者も権利訴え

「延命治療をやめ、死なせよ」という。孤独や老衰、「人生はもう無意味」と感じる心。02年の安楽死法は、医師が「耐え難い苦痛がある」と「苦痛は治せない」などの要件を満たして患者を安楽死させた場合、刑法の殺人罪に問われないと定められた。

法は安楽死を末期患者に限定せず、精神的苦痛を理由とする場合も認めている。昨年、認知症を理由とする安楽死は169件にのぼった。

母は老衰で身動きできなくなった。「介護を待たず、自分の人生は耐え難い」と安楽死を求めたが、医師は「病気ではないから」と拒否した。

母はそれでも執拗に死を求め、ヘリンハさんが見かねて致死薬を渡した。母は薬入りヨーグルトをむさぼり、笑顔でベッドに横たわった。

## 自殺幇助で起訴

目下、論議的の死め権利を認めるべきか否か

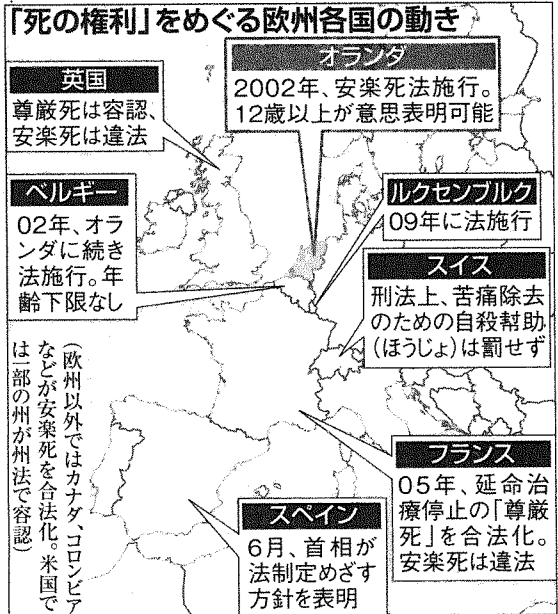
母は老衰で身動きできなくなった。「介護を待たず、自分の人生は耐え難い」と安楽死を求めたが、医師は「病気ではないから」と拒否した。

母はそれでも執拗に死を求め、ヘリンハさんが見かねて致死薬を渡した。母は薬入りヨーグルトをむさぼり、笑顔でベッドに横たわった。

## 容認拡大に批判

オランダは17世紀、カトリック王政に抵抗して共和国として独立。宗教に縛られない自由貿易国として成長した。「他人に迷惑をかける限り、個人の自由を尊重すべきだ」という気風は欧州でも特に強い。安楽死は1973年、病床の母を死なせた女医の裁判判決で容認要件の骨格が示され、長年の国民論議が法に結実した。

しかし、元来の目的は、望まない延命や末期がんの痛みから患者を救うことだったため、容認範囲が拡大することへの批判も強い。テオ・プー氏(倫理学教授)は「国民は死を管理するという考えに慣れ、なすすべなく安楽死が広がっている」と警告する。



## 104歳死を求めスイスへ

今年5月、104歳のオーストラリア人科学者アビッド・グドールさんが安楽死を求め、スイスに渡航した。「死なせてくれ」といわれているのはつらい。だが、医療の進歩でなかなか死ねない時代、見て見ぬふりをすべきではない」と話す。

グドールさんは死の前日に記者会見し、「私の死を機に、高齢者の自決権について考えてほしい」と話した。ニッケさんの支援団体の会員は米欧やカナダに約5万人。日本にも数百人いるという。